

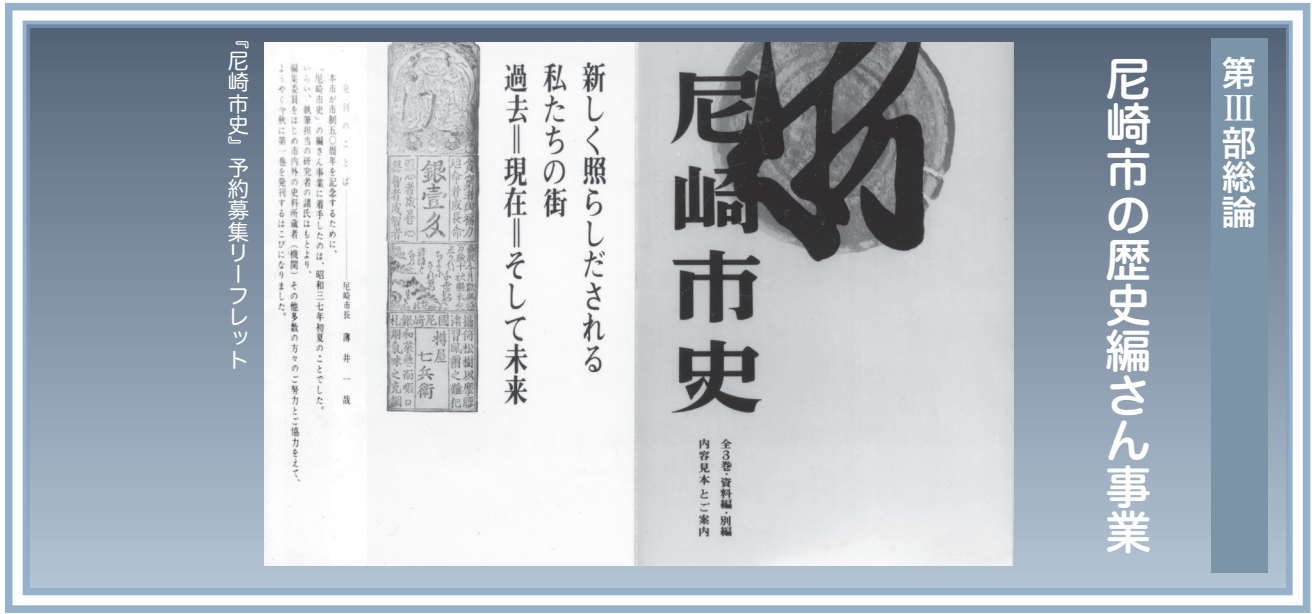
第Ⅲ部 ガイダンス

調べる

尼崎の歴史

### 第Ⅲ部総論

## 尼崎市の歴史編さん事業



### はじめに

尼崎市は歴史を大切にし、熱心に歴史編さん事業に取り組んできた自治体です。この第Ⅲ部「調べる 尼崎の歴史」では、これまで尼崎市が取り組んできた編さん事業を継承し、各時代の歴史を調べるための手順や作法を解説します。最初に、これまでの尼崎市の歴史編さん事業をふりかえり、本書を刊行するに至った理由を述べていきます。

#### 一、尼崎市が取り組んできた歴史編さん事業

『尼崎市史』の刊行 昭和二〇年（一九四五）以降、全国の自治体が、市町村域の歴史を記した自治体史の編さんに取り組むようになりました。戦後の歴史学は実証的成果を重視し、人間が営んださまざまな事象に目配りし、時代の特質と、次の時代への展開を明らかにするようになりました。戦後刊行された多くの自治体史も、こうした戦後歴史学の手法・成果をふまえて編さんされました。

大阪府内では一九五〇年代に貝塚市・寝屋川市・豊中市等が自治体史編さんを開始しており、八〇年代の終わり頃までに大半の市町村が刊行に取り組みました。兵庫県内では昭和三〇年に始まる西宮市の取り組みが早く、古代から近代までの通史が記された本文編と、関係する史料を集めた史料編という『西宮市史』のスタイルは、その後の自治体史のモデルとなりました。

尼崎市は、市制五〇周年の記念事業として昭和三七年に『尼崎市史』編さんに着手し、四年後の昭和四一

猪名庄にみる東大寺による土地開発対象地の比定、猪名寺廃寺の発掘成果などを事例に、地域の具休像を掘り下げて叙述しています。

また、近代を例にあげると、近代の市域には企業・工場が進出し、尼崎は工業都市として発展していきます。市史では、これを日本及び世界的な時代状況と関連付けながら叙述したことで、市域から日本の近代史を見通すことができます。

このように、市史では、歴史学界で共有される一般論を市域の事例で確認するのではなく、市域の事例から各時代における市域の特性をおさえ、さらに日本史の一般論を考えるという叙述スタイルがとられました。そのため、「古代・近代の尼崎」ではなく、市域を主体とした「尼崎からみた古代・近代」となりました。中世・近世にも同じことがいえます。

市域の個別事例を時代状況のなかで位置付けるには、日本全体の政治・経済・文化の大きな流れを叙述しないわけにはいきません。加えて、近代以降に定められた自治体区域だけを対象に通史を叙述しようとする、史料や事例を欠き、政治・経済史の一般論の叙述に紙幅が割かれがちです。

市史の場合、たとえば中世では、戦乱の原因となった複雑な政治的対立や戦乱の経過をていねいに叙述した分、京都や他地域の記述が増え、叙述が拡散した感があります。また近世では、幕末の叙述に同様のことが指摘できます。市域にも幕末を叙述する事例は豊富にありましたが、それと激動の幕末政治史を関連付ける視点が不十分であったため、市史では一般的な政治史の叙述のすまきに、市域の個別事例が埋め込まれていくような印象を受けます。

年に第一巻を刊行しました。『西宮市史』の構成に倣って、本編（通史編）三巻、別冊（尼崎の戦後史）一冊、史料編六巻、別編四巻の全一三巻一冊からなる市史を編さんし、最終の第一三巻を刊行して事業が終わるのは昭和六三年のことです。

尼崎市はこれより早く、大正九年（一九二〇）にも市史編さんに着手し、昭和五年から一〇年にかけて『尼崎志』全三巻を刊行しています。続巻の計画もありましたが刊行には至らず、よって『尼崎市史』（以下、市史と略す）は、尼崎市にとって最初の完結した市史となりました。

第一巻古代（尼崎平野の形成、縄文・弥生・古墳時代から飛鳥・奈良・平安時代・中世（鎌倉・南北朝・室町・戦国時代）、第二巻近世（江戸時代）、第三巻近代（明治・大正から昭和戦前期）、別冊戦後史のそれぞれの評価と課題は、この第Ⅲ部の各章第一節（入門編）に詳述していますので、以下、それらを総合して、全巻に共通する視点、成果、課題を記していきます。

**自然・地理** 人間の歴史は、地下構造を含めた地形に規定されることが少なくありません。そこで市史第一巻は、「尼崎平野の形成」から叙述を始めています。「尼崎平野の形成」は、都市開発が進む以前の原地形を復元し、尼崎平野地下の地質構造と平野形成史を明らかにすることに、はじめて科学的に取り組みました。データ不足という条件下の作業であり、さらに当時は分析手法が未確立であったため、その叙述内容は後に大きく修正されることになります。しかしながら、自然地理と、遺物・文献・絵画等の資料を扱う文献史学を連関させて市域の歴史を明らかにしていくという視点は、その後の編さん事業に継承されました。

市史の歴史時代の記述においても、その視点は貫かれています。たとえば中世の章では、土砂の堆積による海岸線の南下によって生まれた土地が開発され、その帰属をめぐって荘園領主の間に争論が起るということように、自然地理的特性を視野に入れながら、土地形成と開発の歴史的意義が叙述されています。

**一貫した視点** 自治体史は、多くの分野を叙述しなければなりません。そのため、複数の執筆者が、ひとつの時代の叙述を分担することも少なくありません。この点、市史は、各時代とも文化・遺跡等の分野を部分的に分担していますが、政治・経済・社会といった中心部分の叙述はおおむね一人の執筆者が担当しており、一貫した視点からさまざまな事象を関連付けて描く通史となりました。

たとえば古代では、大和王権直轄の港湾である「大坂湾岸地域」としての特殊性」という視点から市域が叙述されており、古代地域史として出色の自治体史となりました。あるいはまた、戦後歴史学では、経済に関わる事象を実証的に分析し、各時代の社会構造とその展開を明らかにする社会経済史が主流となりました。市史のなかでもとくに近世・近代は、この手法が顕著に表れています。

**市域の事例を、日本史の大きな流れのなかに位置付ける** 市史の叙述は、史料の制約から一般論の解説にとどまらざるを得ないことがあります。とりわけ史料が限られている古代史は、こうした傾向に陥りがちで、自治体区域内の事例だけで古代史を叙述することに苦心している自治体史も少なくありません。この点、市史の古代は、国・郡・里制、律令税制等、古代史を理解するのに必要な事象について、川辺郡条里の復元



『尼崎市史』全一三巻、別冊一

**住民の成長** 市史の各時代の叙述において、もう一点共通して重視された視点がありました。それは、**住民の成長**を描く、ということです。

たとえば中世前期、荘園領主の間にたびたび境界争いが起こっていたことが確認できます。それは、新たに生まれた土地や未開地が開発されていたからです。市史ではその開発主体が荘園領主だけでなく、住民でもあったことを叙述しています。市域には東大寺・鴨社など、複数の荘園領主の領地が錯綜していました。住民は、ある問題では東大寺、別の問題では鴨社を頼るというように、支配の錯綜をたくみに利用し、自分たちの権益を守ろうとしました。そして、それが荘園領主間の対立を激化させ、やがて領主支配を弱体化させていくひとつの力になったのだと思われます。

続く中世後期、住民はさらに成長し、地域支配を進めようとする守護や大名に対抗するようになります。

市史でも、尼崎の一向一揆が強勢であったことの叙述に紙幅が割かれています。

こういった叙述の視点は、他の時代にも同様に見出すことができます。古代においては、奈良・京の貴族、寺社、武士に対して、尼崎地域の農民や海民、芸能に関わる神崎の遊女たちが自立性を高めていくことが叙述されます。同様に、近世の住民による井組・水利組合形成及び井組間の対立から和解に至る過程や、近代の社会問題解決を求める労農運動などに紙幅が割かれており、各時代において、住民が歴史を動かす主体として描かれています。

**発展と矛盾** 近代化によって、国内の経済構造は大きく変動することになりました。明治一〇年代には、大藏卿松方正義の経済政策によって深刻なデフレーション

**新しい課題の発見** このように歴史書としてすぐれた水準にある市史は、戦後自治体史のなかでも高い評価を与えられるに相応しいものといえます。と同時に、市史の編さんを通して、新しい課題もみつかりました。

たとえば中世後期や幕末期のように、複雑な政治状況をていねいに叙述しなければならぬ時代において、そのことに紙幅が割かれ、市域に則した叙述が不十分になった部分があります。また、市史で重視された住民の成長についても、たとえば中世後期、成長と同時に進行的な階層分解を含めて、この時代の特徴を十分に叙述することはできませんでした。近代においても、史料調査だけでなく、市民への聞き取り調査を実施し、体験記録を収録することまではできていません。歴史地理分野の研究が十分ではなく、自然地理と文献史料を連関させていくうえでは、さらなる研究の蓄積が必要であることも明らかとなってきました。

これらは、市史の編さんによって浮かび上がった新しい課題です。これらの課題に取り組むためには、史料の調査・収集、地域史の調査・研究を継続していくことが必要でした。

## 二、市史以降の取り組み

**地域研究史料館の開館** 市史編さんを通して収集された史料を保存・公開し、あわせて継続的に地域史の調査・研究を行なう機関として、昭和五〇年一月に市立地域研究史料館が開設されました。市レベルでは、全国で二番目に設置された文書館施設です。史料館の開館によって市史編さんの活動は継承され、市史によって浮かび上がった新しい課題にこたえることが可

シヨンが起こり、都市・農村ともにきびしい不況に見舞われます。階級分解の進行とともに、農村では寄生地主制が成立し、都市ではブルジョア層が形成されます。市史の近代は、市域の具体事例からこの時代の社会構造を分析し、これが明治期から昭和戦前期にかけての地域社会構造の原型を作ったことを明らかにしています。同時に、発展する近代、右肩上がりの経済成長の一方で、寄生地主制や農村不況等の矛盾が進行していたことも叙述しています。

発展と矛盾の両側面を叙述するという近代の姿勢は、全時代に共通しており、たとえば中世後期、新しい生産技術や土地・水に関わる権利を獲得して成長する小農民がいる一方で、没落し、山陽道の宿場で飢人や病人として流浪するものも少なくなかったことに言及しています。

**戦後史** 昭和二〇年代の戦後復興から三〇年代後半の高度経済成長初期までを叙述する『尼崎の戦後史』は、昭和四四年に刊行されました。闇市、ジエーン台風、製造業の復興、公害問題、六島誠之助・阪本勝両市長の功績、労働運動・争議等が軽妙・平易な筆致で詳述されており、第一―三巻とは趣を異にします。

その背景には、同書編さん当時、日本史研究における現代史研究の蓄積が少なかったことや、一次史料の調査・収集が進んでいなかったため新聞史料に依拠せざるを得なかったことが、大きな要因としてありました。新聞史料に依拠した分、事件性のない市民の日常生活の叙述は手薄であり、残念ながら本格的な通史にはなりませんでした。

**史料編** こういった『尼崎の戦後史』の評価からわかるとおり、叙述のもとになる史料の収集は、自

能になりました。

開館以来四〇年以上に及ぶ活動により、膨大な古文書・近現代文書類、歴史的公文書・行政資料、地図、絵はがき、写真・フィルム類といった、市域及び歴史的関連地域の多様な文字史料が調査・収集されました。加えて全国の自治体史や歴史関係の雑誌・紀要、事典、史料集、専門研究書など、調査・研究に必要な多様な刊行物も集められました。

これらは市民に公開され、調査・研究のため何度も足を運ぶ市民や研究者も多く、電話・メール等を合わせると、年間二、〇〇〇人以上の利用者があります。

**『地域史研究』** 調査・収集した史料の所在や研究を社会に発信し、成果を蓄積していくことは、史料館の大切な役割です。それを担ってきたのが、史料館の研究紀要『地域史研究』（以下、紀要と略す）です。

同誌は、市史編さんが続いていた昭和四六年一〇月、尼崎市史研究紀要として刊行を開始しました。当初の年三冊から二冊となり、現在は従来の約二倍の頁数となった分、年一冊の刊行ですが、四四年間も続いており、平成二七年一〇月には一一五号を数えることになりました。

紀要は、歴史学界に一石を投じる重厚な研究論文から、身近な歴史や史料への興味・関心、先祖調べ等の素朴な疑問から始まる調査成果をまとめたものなど、多彩な論考が掲載されてきました。また、地名研究、伝承研究、尼崎城研究のように、紀要を通じて成果が蓄積されてきたテーマもあります。史料公開の体制が確立され、専門職員の助言も得られることから、史料館の史料を用いて卒論・修論に取り組む学生もあり、その成果も掲載されてきました。

治体史編さんにとって不可欠です。市史編集事業は史料調査・収集に努め、近世・近代文書については悉皆調査が行なわれました。そのことは、市史編集資料目録集第一―二七集としてまとめられた、近世・近代文書目録からうかがうことができます。

ただし、史料編に掲載されたのは、調査し得た文書のごく一部です。史料編には新発見の史料も多く掲載されており、専門研究者にとっては有効に活用できる史料集になっています。その一方で、原文翻刻を掲載するのみで書き下し文や解説がなく、また通史編のどの部分の叙述に関係する史料なのかは第四巻古代・中世史料編を除いて記されていないなど、これを利用する市民にとっては不親切な側面があったことも否めません。

ところで、市史の通史編では、各時代の住民の成長の叙述に紙幅が割かれていました。それは、史料編に収録される文書の残り方にも表れています。中世前期が奈良・京の荘園領主側の史料を中心に叙述されるのに対して、中世後期は大覚寺・本興寺をはじめ地域の側に残された史料も活用して叙述されます。中世後期の史料が地域に残るのは、支配者が変化したこと、同時に地域住民が成長し、自治の能力を高めていったからです。近世になると、さらに大量の文書が町村に残るようになります。幕藩領主は、中世後期までに町村住民が獲得した自治能力を継承する近世の民の力を活用しなければ、円滑な支配を行なうことはできませんでした。そのことが、近世文書の作られ方・残り方に表れています。

史料の調査・収集は、その時代の特徴を知ることにもつながるのです。

史料紹介も、紀要の重要な役割のひとつです。史料館が新たに調査・収集した史料の情報を公開し、さらには市史史料編に未掲載かつ研究上必要・有益な基礎史料や、トピックとなる興味深い史料を紹介してきました。史料紹介に触発されて、研究論文が執筆され、掲載される例もあります。市民グループが絵図・文書を用いて取り組んだ城下中在家町の復元に関する報告レポートや、戦前・戦後の労農運動の回想など、先述した新しい課題に取り組むうえで、その基礎となる成果も掲載されてきています。

このように、専門研究者や史料館職員の研究論文だけでなく、市民の多彩な調査・研究成果が紀要に掲載されてきました。それが実現したのは、史料館に専門職員が配置され、調査・研究を支援し、成果の寄稿を働きかけてきたことによるところが大きいといえます。寄稿の希望者も増え、年一冊の刊行では対応できないことさえあります。そんななか、一定の調査・研究水準を満たすものだけが掲載されてきたことから、寄稿者にもそれを満たす努力を惜しまないという良い緊張感が生まれ、良質の刊行物という伝統が築かれてきています。

**『尼崎の地名』と『尼崎地域史事典』** 昭和六〇年、史料館から『尼崎の地名』が刊行されました。地名は土地に刻まれた歴史だといわれながら、高度経済成長以後の都市化によって抹消・改変されてきた現状をふまえ、地域の地名を記録にとどめることを目的とするものでした。

「はじめに」によると、史料となる公的文書が散逸・廃棄されていたため、刊行には苦心したようので、史料を保存することの重要性が訴えられています。市史第

一〇巻も小字名を記録していますが、本書はその後に蓄積された記録を活用し、地名研究の基礎データの決定版として刊行されました。また、大字別の小字図が掲載され、町名改正・住居表示の経過も図示されています。

市史には、専門的な研究用語も登場し、読み進めることがむずかしい場合もあります。そこで平成八年、史料館編集の『尼崎地域史事典』が刊行されました。市域の歴史に関わる事項・事件・人名・地名等、一、三四六項目を事典型式で解説しており、市史を読むための補助というばかりでなく、独立した刊行物として本書の解説を読むことで、尼崎地域史への興味・関心がかき立てられます。

今日に至るまで、自治体が事典の編さんに取り組んだ例はほとんどなく、全国的に見ても先駆的な事業でした。遺跡所在図、近世の所領変遷、年号一覧、度量衡換算表等も収められており、良質の事典といえます。索引を欠くことが残念ですが、現在では同書をもとに内容を補訂し、掲載項目も拡充したウェブ版尼崎地域史事典「アペディア」(apedia)を公開しています。ウェブ・データベースとして設計・構築されており、キーワード検索により関連項目を含めての検索利用が可能となっています。

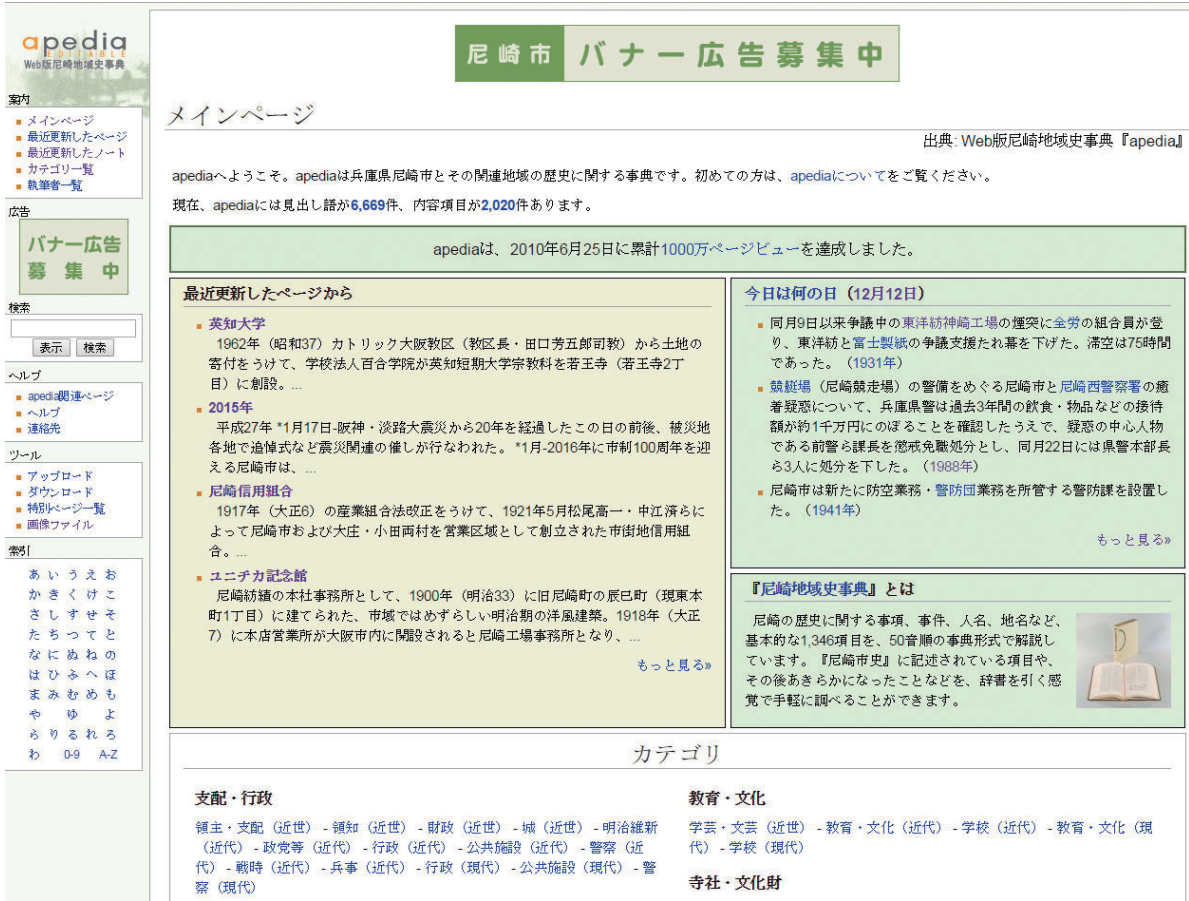
『図説尼崎の歴史』市史以降、史料館を拠点として、尼崎地域史の調査・研究や史料収集が進められてきました。史料館に来館し、みずから調査・研究する市民も増え、市史では叙述できなかった、あるいは関心が向けられなかったテーマを開拓し、掘り下げる成果も生まれるようになりました。

こうした状況をふまえ、市制九〇周年を記念する新

市史として、『図説尼崎の歴史』上下巻（以下、『図説』と略す）が平成一九年に刊行されました。どういう新市史を刊行するのか、どのような読者を想定するのか、通史か、テーマを中心にするのか等々をめぐり、史料館の専門委員と職員は議論を重ねました<sup>1)</sup>。その結果、史料館を活用して調査・研究を行なう市民、言い換えれば「読んで活用してくれる」市民を読者として想定して『図説』を編さんし、小学校・中学校・高等学校の教育現場での活用も期待しました。

こうしてできあがった『図説』は、序説・古代編・中世編・近世編・近代編・現代編の六編からなります。序説以外の各編はさらに二〜四節にわかれており、それぞれの冒頭に「この節を理解するために」という項目を設けて、対象となる時代・分野の特質を概説しました。そのうえで、節を構成する各項目には市史以降に蓄積された成果を盛り込み、市民の関心が高い事象を優先的に取りあげるテーマ構成としました。多くのカラー図版を用いましたが、ビジュアル化することが目的ではありません。史料に関心を持ち、何を読み取ることができるのかを叙述するため、史料の質感がわかるよう、カラー図版としました。また、編年型の通史ではなく、テーマ別の項目によって節を構成するスタイルとしたのは、旧市史の通史としての価値は依然として損なわれていない、と判断したためです。

海岸線の推移、地下構造、表層の微地形をテーマとして取りあげた序説の自然地理のようには、市史後のデータの充実や研究の進展により、大きく深められた項目・テーマもあります。また、市史では不十分であった生活史が取りあげられ、個人の人生から歴史を考える項目が盛り込まれ、近代編・現代編には聞き取り調



Web版尼崎地域史事典"apedia" 自治体によるフリーアクセスの地域史データベースとして、他に例のないきわめてユニークなWebコンテンツ。 <http://www.archives.city.amagasaki.hyogo.jp/apedia/>

査やフィールドワークの成果も反映されました。市民が執筆を担当した項目も生まれました。一方、課題も明らかにありました。市民の関心が高い、身近な事象についての研究は蓄積され、『図説』のテーマもそれをふまえて選択されました。その一方で、市史にみられたように、地域の事例を日本史の大きな流れのなかに位置付ける、あるいは地域の事例から歴史学研究の成果を問いつけるという深みに欠けている部分があります。史料館は市民の関心にこたえ、調査・研究を支援することが重要な責務ですが、同時に市史を編さんするうえで、こうした大きな視点からの研究を促し、組織することも必要です。それが十分できていなかったことが、『図説』にこういった弱点が生まれた一因であったと考えられます。



『尼崎地域史事典』



『尼崎の地名』



『図説尼崎の歴史』

**取り組むべき課題** このように、市史を発展させるさまざまな取り組みが続けられてきました。それぞれの事業は、その場限りのものではなく連関しています。

開館以来、史料館は史料の調査・収集を続け、多くの成果が蓄積されてきました。その結果、みずから調査・研究する来館者も着実に増えてきました。しかし、『図説』で明らかになったように、市民の関心は身近な事象に集中する傾向があり、また史料に則して事実を明らかにすることだけで終わることも少なくありません。『図説』のひとつの目的は、たとえば近世であれば古文書を読めるようになるだけでなく、さらにみずからの問題関心や研究テーマを持って調べることへの挑戦を促すことでした。各時代・分野において、そういった読者の主体性の喚起や双方向性の活用をめざしましたが、残念ながらわかりやすい読み物の編さん・刊行にとどまった感否めません。

### 三、「調べる 尼崎の歴史」

第Ⅲ部「調べる 尼崎の歴史」は、こういった『図説』の課題をふまえ、調査・研究の手法を解説することを目指しました。第一章尼崎の地理・地形、第二章尼崎の古代、第三章尼崎の中世、第四章尼崎の近世、第五章尼崎の近代、第六章尼崎の現代という六章と特論からなり、各章は〈入門編〉〈史料編〉〈実践編〉により構成されます。

**入門編** 各章の第一節〈入門編〉では、市史及び市史以降の取り組みについて、時代・分野ごとに成果と課題をまとめました。それは、史料館を中心に、取り組んできた事業を自己点検したということです。当

然そこには、各入門編執筆者の視点や問題関心が反映していますが、執筆にあたっては、同じ時代・分野の調査・研究に実績を有する研究者や、編さん事業関係者との意見交換の場を設けました。

これは、今回はじめて取り組んだことではなく、『図説』を刊行した際にも市民に刊行目的・意義を理解してもらったための講座や意見交換の場を設け、また研究者や読者市民のみなさんに書評をお願いしました。市史をはじめとする自治体刊行物も、外部の視点を入れた点検を受けることで、新しい課題が浮かび上がると考えてきたからです。言い換えると、刊行するまでの努力・工夫と同じように、刊行後の取り組みも重要だと考えてきたということです。

こういった、ある種の共同作業を通じて作られた〈入門編〉が、読者のみなさんに対するガイダンスとして持つ意味は、調査・研究に取り組むうえで理解しておく必要がある各時代・分野の研究史を整理した、という点にあります。

それぞれの時代・分野・テーマに沿って調査・研究を行ない、それを論文などにまとめる際には、それ以前の研究史における成果・課題を明らかにしたうえで、自身は何を明らかにするのかを提示しなければなりません。まずはじめに問題意識と課題があり、それを解決するのに相応しい史料を調査し、研究を進めるという手順を踏むのが一般的ですが、逆に出会った史料そのものに興味・関心を持ち、そこからテーマや課題を見つけ、研究が始まる場合もあります。

どちらのケースにおいても、研究成果をまとめて公表するのであれば、定められた手順を踏むことが必要です。過去の研究史において、同じ問題関心から取り

組んだ成果はないか。あれば、何がどこまで明らかにされているのか。それを踏まえて、自身はどういう視点で分析するのか。史料をはじめ、対象となる素材を調べ研究することで、どういう新しい成果が生まれるのか。こういった見通しや研究史上の位置付けを、論文などの成果物冒頭に明記したうえで論を進めるのが一般的です。

一例をあげると、享保一四年（一七二九）四月、尼崎城下を象が通行しました。八代將軍徳川吉宗に献上するため、交趾国（ベトナム）から長崎に入港した象で、尼崎藩役人・住民たちが受け入れ準備に奔走したことを記した史料が、山下幸子「享保の象行列」として紀要第二巻第二号に収められています。江戸時代に市域を象が通行したことだけでも驚かされますが、象はどのように迎えられたのか、興味をひかれるできごとです。これを研究したのが、紀要第二九巻第三号の山崎幸恵「享保渡来象の馳走について」です。象の通行への関心から研究が始められましたが、そうであっても、論文では研究史を確認し、馳走という視点から象行列を分析することが記されています。論文とするには、こうした営みが不可欠です。

〈入門編〉は、市域を対象にこういった調査・研究を進め、成果をまとめるにあたっ必要となる、各時代・分野の研究史の整理を行ないました。地域の歴史研究では何が課題となってきたのか。いまから調査・研究に取り組むテーマや、対象となる史料から、どのような成果が予想されるのか。〈入門編〉は、調査・研究に挑戦してみようと考えている読者に、研究史における既存の成果を確認してもらったためのもの、という位置付けになります。

**史料編** 歴史研究には、史料が必要です。史料館は膨大な史料・刊行物を収蔵しており、その目録情報や内容をウェブ上、あるいは紀要などの刊行物を通して公開してきています。時代・分野によっては、尼崎市以外の機関が地域の歴史に関連する史料を収蔵している場合も少なくありません。

〈史料編〉は、こうした地域の調査・研究に関わる史料の情報を整理しました。たとえば近世であれば、村の文書や町の文書、武家文書、寺院文書、絵図類などがあります。あるいは近代であれば、尼崎町・市及び合併村が作成した歴史的公文書や、民間の近現代文書類、加えて史料館が精力的に収集してきた地図・写真・絵はがきといった史料があります。このように、

時代・分野によって異なる史料の種類に応じ、その所在や特質をまとめました。調査・研究のための必要文献や、史料はどこで閲覧することができるのか、調査・研究にはどのような準備が必要なのかを記すことにも努めました。

時代によって史料の残り方は異なりますし、調査・研究の手法も同じではありません。たとえば近代・現代について調べる際、日記・手紙・回想といった個人資料の活用や、聞き取り調査が重要な調査手法のひとつとなります。そこで、広い意味での「史料」あるいはその収集方法として、これらについても解説する項目を用意しました。

**実践編** 漢文調で記されている古代・中世の文書

#### 新「尼崎市史」のあり方について、市民とともに考える取り組み

『尼崎市史』の経験をふまえて、市制80周年振興事業として平成8年に開始した新尼崎市史編集事業においては、どういった新市史をつくるのかを市民とともに考え、さらに刊行した新市史を検証する取り組みを継続してきています。



平成8年10月26日開催「歴史と文化を考えるシンポジウムー市民とともにつくる新「尼崎市史」」パネルディスカッション（於尼崎市総合文化センターアルカイックホール・オクト）



平成19年5月26日開催、『尼崎市史』を読む会特別企画・新「尼崎市史」発刊記念「『図説尼崎の歴史』に学ぶ地域の歴史」（於園田学園女子大学）

一歩踏み込んだ解説を試みました。

史料をどのように解釈したのか。絵図から何を読み取ることができるのか。また、研究事例をあげて、どのような史料を用い、どう解釈し、何とどう連関させてひとつの歴史像を構築しまとめているのかを解説しました。史料館所蔵史料を活用し、研究を発表した経験のある市民にも執筆をお願いし、利用者の立場から、「史料を読む」営みを解説していただきました。〈実践編〉は、解釈した結果を叙述するのではなく、その過程を示すことに努めました。

これまで史料館は、市史・『図説』をテキストとする「『尼崎市史』を読む会」を開催し、叙述内容を解説してきました。また、市民主体の「尼崎の近世古文書を楽しむ会」などの活動をサポートし、さらには市民自身の手によるさまざまな歴史編さん事業にも協力してきました。本書は、そうした活動・協力を軽減するために企画したわけではありません。独学で調査・研究する市民向けという側面もありますが、市民の調査・研究を支援する際の対話に必要な道具を用意したということです。それは、市史がどんなに重厚な通史であっても、『図説』がわかりやすい内容であっても、また地域史事典があっても、利用者と向かい合い、口頭でやりとりする時間を惜しんではいけないということとを、長い史料館の活動を通じて学んできたからです。

尼崎市は市史以来、歴史編さん事業を継続し、それを担う史料館を開設・運営してきました。それは、事業を一時的なものに終わらせないという認識があったからでしょう。その結果、史料館は四〇年以上、決して派手ではない地道な活動を積み重ねることができ、市民の歴史研究所となることができました。

## おわりに

江戸時代、市域には城下町尼崎のほか、七〇以上もの村がありました。村ごとに村の政治・行政を担う村役人がいて、他の村民も村役人に協力しました。ひとつひとつの村が自治体であり、祭りや年中行事を行なう暮らしの単位でした。人々は村の一員としての自覚を持ち、政治・行政を考えることで、自分たちの暮らしが豊かになるよう努めました。市史が重視した住民の成長とは、こうした社会で育まれたものです。

歴史の知恵に学ぶとよくいわれますが、自然地理や社会環境の違いを考えずに、過去と現在を自由に行き来するかのような思考は慎まねばならないと思います。七〇以上の村がひとつの市域となった現在、直面する問題が複雑なことは当然です。住民の生きる空間の広さ、職業の多様さ、その土地で生きる時間の長さなど、江戸時代の村と現代社会には大きな違いがあります。

それでも、現代社会が直面する諸問題の解決の手がかりを得るには、歴史を考えることが大切です。それは、私たちが直面する課題は、歴史の積み重ねがもたらしたものだからです。歴史の地層を一枚ずつ剥がしていくことで、問題の核心がみえてくるでしょう。

現代社会では、直面する諸問題の解決や未来を展望するにあたり、しばしば市民主体の地域づくりや地域コミュニティの活性化が求められます。力強いコミュニティであった江戸時代の村はそのモデルになります。が、安易に比較するのではなく、江戸時代の自然地理・社会環境をていねいに読み解かなければなりません。そのようにしてはじめて、その営みが現代の諸問題を

考える力になるでしょう。

歴史の研究は、必ずしも現在の課題の解決に直結する必要はありません。大切なことは、史料から事実を確定し、その因果関係を考え、それを歴史上に位置付けるという思想的営みです。そして、こうした歴史的な思考が、物事を判断するひとつの方法となるようにすることです。虚実混じる情報が氾濫し、そうであってほしいという思い込みや事実をふまえない言説が飛び交う現在では、こうした歴史学の思想的営みは、生きるための力になるでしょう。

史料を読み事実を確定し、因果関係を考えて意義を判断するという営みは時間がかかります。すぐにはありませんが、生きていくうえでじわじわと役立ちます。こうしたことは、研究を通じて実感できるものです。そして、現在にも必要な住民の成長とは、こういう力量を身につける努力をすることだと思います。

本書第III部「調べる 尼崎の歴史」は、その一助になりたいという意図から企画・編さんしたものです。

〔注〕

〔1〕『図説尼崎の歴史』編さん刊行をめぐる議論の経過や刊行意図については岩城卓二『図説尼崎の歴史』に学ぶ地域の歴史」（『地域史研究』第三七巻第二号）参照

〔2〕前掲注〔1〕は図説企画・執筆者の立場から編さん意図・目的を解説した市民講座の講演録。また、史料館が研究者・市民に図説の評価執筆を依頼したものと、同じく『地域史研究』第三七巻第二号掲載の古市晃・高岡裕之・田中敦の各氏による書評がある。

〔執筆者〕 岩城 卓二